

畜産総合研究センター課題評価専門部会
平成18年度課題評価結果報告

平成18年8月

畜産総合研究センター課題評価専門部会

は　じ　め　に

県の試験研究機関は、社会経済情勢等の変化や県民ニーズに的確に対応するとともに、効率的かつ効果的な試験研究の推進と成果の迅速な普及に努めていくことが求められています。

このため、千葉県では平成15年度からすべての試験研究機関を対象に評価制度を導入し、試験研究機関全般の評価を行う千葉県試験研究機関評価委員会及び委員会の下部組織として研究課題を評価する各試験研究機関課題評価専門部会が設置されました。

当専門部会は、畜産関係の専門家4名で構成され、畜産総合研究センターにおける研究課題の評価を実施することになっています。

畜産総合研究センターでは、先端技術を活用して安全で高品質な畜産物を効率的に生産するため、畜産農家が求める生産性の高い革新的な技術や、地域資源の循環利用を中心とした環境にやさしい畜産技術の開発が行われており、研究課題は以下に示す7つの基本目標に区分され、この基本目標に対して22の大課題を設定し、その基で試験研究が実施されています。

- 1 農林水産業の生産力向上
- 2 県民生活を守る環境に調和した農林水産業の推進
- 3 国際化に対応できる力強い経営体の育成
- 4 農林水産資源の維持増大とその持続的利用
- 5 消費者ニーズに対応した農林水産物生産・流通・加工システムの構築
- 6 県民の暮らしを豊かにする農林水産業の有する多面的機能の発揮
- 7 次世代農林水産業を支える革新的技術への挑戦

専門部会では、このような畜産総合研究センターの試験研究課題全95課題の中から、特に県の施策、県民からの要望課題及び重点項目にかかる重点的な5研究課題について、農林水産部所管試験研究機関課題評価実施要領に基づき、畜産総合研究センターからの説明聴取を2回実施し、専門部会構成員が専門的見地から検討を行い、ここに報告書を作成しました。

今回の課題評価が、今後の畜産総合研究センターにおける試験研究をより充実し、千葉県畜産業の振興に資することを期待します。

平成18年8月

畜産総合研究センター課題評価専門部会 部会長 阿部 亮

目 次

1	畜産総合研究センター課題評価専門部会 部会構成員名簿	1
2	課題評価結果	
(1)	総括	2
(2)	事前評価	
	養豚における未利用資源の有効利用に関する研究	3
	効率的な浄化処理施設の維持管理技術に関する検討	
	(1)固液分離機等の稼動実態と性能調査	5
	酪農経営安定に向けた牛群検定情報の高度利用	7
(3)	中間評価	
	安価な発酵飼料給与による肉用牛の低コスト肥育技術の開発	10
(4)	事後評価	
	牛ふん堆肥と農場有機性残さとの混合堆肥化の検討	12
3	畜産総合研究センター課題評価専門部会開催日	14

1 畜産総合研究センター課題評価専門部会 部会構成員名簿

区分	所属・役職	氏名
部会長	日本大学生物資源科学部 教授	阿部 亮
部会 構成員	独立行政法人農業生物資源研究所 監事	元井 葎子
〃	社団法人家畜改良事業団理事長	香川 莊一
〃	堀江ファーム経営者	堀江 光洋

2 課題評価結果

(1) 総括

評価対象とした事前評価3課題については、県民ニーズ等を的確に把握した上で課題設定されており、また、研究課題としての重要性及び公共性が高く、県の研究機関が取り組むべき課題である。また、今後の研究成果の波及効果及び発展性が期待される課題である。

中間評価1課題については、計画に沿って適正に進捗^{ちよく}しており、今後の成果が期待される課題である。

事後評価1課題については、適切な研究計画のもと、少ない研究資源で計画に近い成果を得たことは評価できる。

各課題の総合評価は、下表に示したとおり、事前評価3課題が「採択した方がよい。」、中間評価1課題が「妥当である。」、事後評価1課題については「計画に近い成果が得られた。」との結果である。

なお、各研究課題の評価項目ごとの評価と所見・指摘事項を含む詳細については、別添の課題評価票のとおりである。

区分	研究課題名	評価結果
事前評価	養豚における未利用資源の有効利用に関する研究	採択した方がよい。
事前評価	効率的な浄化処理施設の維持管理技術に関する検討 (1) 固液分離機等の稼動実態と性能調査	採択した方がよい。
事前評価	酪農経営安定に向けた牛群検定情報の高度利用	採択した方がよい。
中間評価	安価な発酵飼料給与による肉用牛の低コスト肥育技術の開発	妥当である。
事後評価	牛ふん堆肥と農場有機性残さとの混合堆肥化の検討	計画に近い成果が得られた。

(2) 事前評価

平成18年度畜産総合研究センター課題評価票(事前評価)

部会構成員氏名	阿部 亮
	元井 霞子
	香川 莊一
	堀江 光洋

研究課題名	養豚における未利用資源の有効利用に関する研究	
研究期間	平成18～20年度	
研究目的・計画	<p>1.目的 外食産業等で発生する食品残さは、従前から焼却処分、肥料化、飼料化により利用されてきたが、より付加価値の高い飼料化を図り、食品残さの有効利用による飼料自給率の向上や資源循環型畜産の構築並びに養豚農家の経営コストの低減化を目指す。</p> <p>2.計画 本試験では、食品残さをはじめとする未利用資源を豚の飼料として活用するため、残さ飼料の配合設計や飼料調製等の技術について検討するとともに、生産された豚肉の肉質評価を行う。 食品残さの飼料化の検討 食品残さの給与効果の検討 食品残さの実用化における経済性の検討 様々な未利用資源の検討</p>	
	評価項目	所見・指摘事項等
1. 研究課題の重要性(県民ニーズ等をふまえたものであるか。)	a.高い b.妥当 c.低い	・食品リサイクル法が施行されている現在、食品加工残さ等が多く排出されているにもかかわらず、その有効利用が進展していない。食品残さの有効利用は、廃棄、焼却などによる社会コストの削減、環境汚染の抑制になるばかりではなく、畜産面の活用は、飼料コストの低減、養豚農家の経営安定に役立つことが予想され、その技術開発の価値は高く、重要な課題である。
2. 研究課題を県が行う必要性(国、市町村、民間に任せられないか。)	a.高い b.妥当 c.低い	・県内の食品流通、飼料生産及び養豚農家のコーディネーターとしての役割。 ・県の「環境に優しい」、「美味しい豚肉作り」を推進。 ・飼養試験等によって、その利用技術を確立し、農家を指導するためには県の試験研究機関が行うことが重要である。 ・千葉県は、食品残さ等が多量に排出され、一方、全国でも有数の養豚産地であるところから、両者の要請に応じて県がこれを取り上げることは大変意義がある。

評価項目		所見・指摘事項等
3. 研究計画の妥当性(研究計画が研究を遂行するのに適切であるか。)	<input checked="" type="radio"/> a.高い <input type="radio"/> b.妥当 <input type="radio"/> c.低い	<ul style="list-style-type: none"> ・未利用資源飼料の特性を活かした飼料設計となっている。 ・本研究を遂行するためには、研究用飼料材料の量的・質的に安定した供給が得られるようにする必要がある。 ・食肉の安全性を確保する面からも、試験豚の飼養・健康管理についても、試験期間中において血中尿素態窒素(給与飼料におけるタンパク質利用効率の指標)等の具体的項目を設けてチェックすることが必要である。 ・養豚経営では飼料はコスト面と豚肉の品質面で影響が大きいので、養豚経営にとってマイナスとならないよう、この両面からの成果を期待する。
4. 研究資源の妥当性(研究費や人材等が研究を遂行するのに適切であるか。)	<input type="radio"/> a.高い <input checked="" type="radio"/> b.妥当 <input type="radio"/> c.低い	<ul style="list-style-type: none"> ・食品残さ等の処理には多くの経費を要するため、飼料化が進めば投資効果には大きなものがある。 ・データの集積が必要である。一般ではできない調査、検査に費用が必要である。
5. 研究成果の波及効果及び発展性(研究成果が試験研究機関の関係する分野に及ぼす影響は大きいか。また、将来の発展性があるか。)	<input checked="" type="radio"/> a.高い <input type="radio"/> b.妥当 <input type="radio"/> c.低い	<ul style="list-style-type: none"> ・県内の養豚用飼料の自給率を高める。 ・養豚農家の経営安定に資する。 ・資源循環型畜産による生産物の品質や安全性を消費者に理解してもらうことが大切である。そのためには、研究成果については一般に情報開示して、食品残さの有効利用をアピールすべきである。 ・食品残さ等は、食品製造粕、販売残品等多様であり、処理が難しいが、このような研究を通して、それぞれの形態などに応じた集荷、処理体系が確立されることを期待する。
6. その他		<ul style="list-style-type: none"> ・成果の普及・定着のため、試験研究実施段階から食品残さ給与豚の流通業者や消費者への理解を得ることが重要である。 ・食に関する教育的効果の大きい課題である。
総合評価	<input checked="" type="radio"/> a.採択した方がよい。 <input type="radio"/> b.部分的に検討する必要がある。 <input type="radio"/> c.採択すべきでない。	

平成18年度畜産総合研究センター課題評価票(事前評価)

部会構成員氏名	阿部 亮
	元井 霞子
	香川 莊一
	堀江 光洋

研究課題名	効率的な浄化処理施設の維持管理技術に関する検討 (1)固液分離機等の稼働実態と性能調査	
研究期間	平成19～21年度	
研究目的・計画	<p>(目的) 家畜排せつ物法施行に伴い、家畜ふん尿の各種処理施設の導入が進められているが、浄化処理施設については負荷オーバーが主因と思われるトラブルや維持管理の難しさが指摘されている。今後とも、処理水質の向上を図るため施設の適正かつ効率的な維持管理が強く求められる。投入汚水の負荷量増大等については施設の増設などで対応することは経済的にも容易ではなく、施設を効率的に稼働させるためには、固液分離等の前処理技術の正確な性能評価が重要なファクターになる。そこで、県下の浄化処理施設で利用されている固液分離機等の稼働実態と性能を調査検討して施設の効率的な維持管理のための技術確立を図る。</p> <p>(計画) 尿汚水浄化処理施設の効率的稼働による処理水質の向上のための固液分離機等の前処理技術に関わる適正かつ効率的な手法を評価検討する。 19年度: 県下の浄化処理施設で利用されている固液分離機の稼働実態と性能検証 20年度: 投入汚水の前処理状況と負荷量軽減化対策の検討 21年度: 負荷量軽減対策の適用と効果の実証</p>	
評価項目		所見・指摘事項等
1. 研究課題の重要性(県民ニーズ等をふまえたものであるか。)	a.高い b.妥当 c.低い	<ul style="list-style-type: none"> ・イニシャルコスト及びランニングコストの高い、浄化処理システムを適切に評価することは大切である。 ・畜産環境、特に浄化処理施設の適正な使用は、環境保全の面で畜産農家に最も強く求められる事項である。本研究は、現在浄化処理上での問題点を解決する上で重要な課題として取り上げる必要がある。 ・畜産経営にとって、ふん尿処理はコスト負担が大きいいため、適切な処理がされない場合が多く、当該経営のみならず環境汚染などで社会全体に与える影響も大きい。このため、適正で効率的な処理体制の確立は、緊急の課題である。

評価項目		所見・指摘事項等
2. 研究課題を県が行う必要性(国、市町村、民間に任せられないか。)	<input checked="" type="radio"/> a.高い <input type="radio"/> b.妥当 <input type="radio"/> c.低い	<ul style="list-style-type: none"> ・本研究遂行のためには、全県下の稼働状況の実態調査が基本となり、それらのデータが、評価・改善・指導を行うことに結びつくので、県の機関でなければ実施は不可能と思われる。 ・ふん尿処理方法は、経営ごとに異なるので、県が実情を十分把握した上で、それぞれの経営形態に応じた処理体制を整備することが重要である。
3. 研究計画の妥当性(研究計画が研究を遂行するのに適切であるか。)	<input checked="" type="radio"/> a.高い <input checked="" type="radio"/> b.妥当 <input type="radio"/> c.低い	<ul style="list-style-type: none"> ・処理施設の稼働実態や性能ばかりでなく、その堅牢性やメンテナンス、ランニングコスト等についても実態を調査する必要がある。 ・販売会社の使用マニュアルとは異なった、経営形態、処理形態に応じた、分かりやすい、県独自のマニュアル(留意点、Q & A等)を作れるような研究実施を望む。
4. 研究資源の妥当性(研究費や人材等が研究を遂行するのに適切であるか。)	<input checked="" type="radio"/> a.高い <input checked="" type="radio"/> b.妥当 <input type="radio"/> c.低い	<ul style="list-style-type: none"> ・処理現場での効果的な対応に期待する。
5. 研究成果の波及効果及び発展性(研究成果が試験研究機関の関係する分野に及ぼす影響は大きいか。また、将来の発展性があるか。)	<input checked="" type="radio"/> a.高い <input type="radio"/> b.妥当 <input type="radio"/> c.低い	<ul style="list-style-type: none"> ・本研究の成果をもって、飼養形態、規模の異なる農家への対応・指導をきめ細かく行えることになるので、その発展性は高いと推測されるが、コストの面で実用性・普及性が危惧(ぐ)されるので、低コスト化の点でも今後の工夫が必要と思われる。 ・養豚・酪農の畜産経営全体の安定に対する貢献を期待する。
6. その他		
総合評価	<input checked="" type="radio"/> a.採択した方がよい。 <input type="radio"/> b.部分的に検討する必要がある。 <input type="radio"/> c.採択すべきでない。	

平成18年度畜産総合研究センター課題評価票(事前評価)

部会構成員氏名	阿部 亮
	元井 霞子
	香川 莊一
	堀江 光洋

研究課題名	酪農経営安定に向けた牛群検定情報の高度利用
研究期間	平成19～21年度
研究目的・計画	<p>1. 目的</p> <p>酪農経営における牛群検定^{*1}は、個々の乳牛の生産性を把握し、これらをもとに乳牛の改良や経営の改善に資するものであり、経営の効率化に有効な手段となる。また、「牛群検定情報の高度利用」は牛群検定事業の要であり、牛群検定実施農家の拡大にもつながる。</p> <p>平成15年度に「千葉県牛群検定情報分析センター」が「畜産総合研究センター嶺岡乳牛研究所」に設置されたことから、この機能を活かし牛群検定成績から得られる生産、栄養、繁殖、乳牛改良等の各種の有益な情報について酪農家が利用しやすいよう情報の処理・加工を実施し、さらに独自情報も加味して高度利用の促進を図る。また、「牛群検定実施農家の乳量階層別生産技術水準」を調査分析し、牛群検定利用効果を明らかにすることにより、酪農経営安定の一助とするとともに、牛群検定事業の推進を図る。</p> <p>2. 計画</p> <p>平成19～20年度 「牛群検定実施農家の乳量階層別生産技術水準」等の調査・分析を行う。</p> <p>平成20～21年度 千葉県酪農農業協同組合連合会から得られるバルク乳(個体別乳を合乳した農場別乳)、個体別乳の「乳中尿素態窒素^{*2}」情報の処理・加工について検討を行う。</p> <p>*1 牛群検定: 農家の飼養する乳用牛について、個体ごとに泌乳量、乳成分、体細胞数、飼料給与量、繁殖成績などを測定・記録し、その分析結果を低能力牛の淘汰や飼養管理の改善などに活用することにより、酪農経営の効率化を図る仕組み。</p> <p>*2 乳中尿素態窒素: 飼料中のエネルギーと蛋白質のバランスの指標となる。</p>

評価項目		所見・指摘事項等
1. 研究課題の重要性(県民ニーズ等をふまえたものであるか。)	a.高い b.妥当 c.低い	<ul style="list-style-type: none"> ・151戸の酪農家のファクトデータ(酪農経営に影響を与える要因で乳牛個体乳量や分娩間隔等)の解析から、千葉県酪農の技術問題・課題を明確にし、改善に資することの意義が大きい。 ・乳牛の飼養管理技術の改善や経営向上のために牛群検定情報を有効利用する着眼は良い。 ・有効利用することによって、未加入農家への関心も高まり、県全体の酪農技術、経営技術の発展にもつながるので本研究課題は重要性が高い。 ・牛群検定制度は、個別経営と産地全体の競争力等の把握ができるため、参加戸数の拡大と情報の利用は、酪農の体質強化の観点から全国的に重要な課題となっている。
2. 研究課題を県が行う必要性(国、市町村、民間に任せられないか。)	a.高い b.妥当 c.低い	<ul style="list-style-type: none"> ・牛群検定情報は、県のみが入手可能である点や、そのデータの分析等は一元的に行う必要があるため、本課題は、県機関でしか行えない。 ・千葉県は、消費地近郊の立地を生かして全国でも有数の酪農産地として発展してきたが、近年、遠隔産地との競合が激化してきているので、産地の強化のために県全体で取り組むことが重要である。
3. 研究計画の妥当性(研究計画が研究を遂行するのに適切であるか。)	a.高い b.妥当 c.低い	<ul style="list-style-type: none"> ・19～20年度の「乳量階層別生産技術水準」の解析では、高泌乳生産の問題点と、この克服を中心課題としていただきたい。高乳量イコール高可処分所得ではない。 ・個体別乳の「乳中尿素態窒素」の情報は本県独自のものと思われ、栄養管理、健康管理の指標として有効活用が望まれる。 ・県内での生産技術水準の調査・分析ばかりでなく、他地域・他県との比較を図り、県間相違点・問題点を把握し、管理・経営等に役立てることも重要である。 ・調査研究終了後、成果の普及段階で、牛群検定に参加していない生産者に働きかけ、多くの経営体の検定参加と経営改善を図り、産地としての体質強化を目指すことが重要である。そのためにも、各種指標の充実と、より多くのデータの蓄積を図ることが必要である。
4. 研究資源の妥当性(研究費や人材等が研究を遂行するのに適切であるか。)	a.高い b.妥当 c.低い	

評価項目		所見・指摘事項等
5. 研究成果の波及効果及び発展性(研究成果が試験研究機関の関係する分野に及ぼす影響は大きい。また、将来の発展性があるか。)	<p>a.高い</p> <p>b.妥当</p> <p>c.低い</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・繁殖成績の改善、乳の衛生的品質(体細胞数)改善への貢献を特に期待する。 ・成果については、農家(加入・未加入にかかわらず)にわかり易く情報開示し、その必要性を知ってもらうことが大切である。そのためには、技術者サイドの体制づくりばかりでなく、農家サイドとの研修会等も頻繁に開催することが重要で、理解を得ることが、今後の発展につながると思う。 ・立地を生かし、より新鮮で品質の良い牛乳の供給に期待する。
6. その他		<ul style="list-style-type: none"> ・酪農組合や検定員との連携を強化する必要がある。
総合評価	<p>a.採択した方がよい。</p> <p>b.部分的に検討する必要がある。</p> <p>c.採択すべきでない。</p>	

(3) 中間評価

平成18年度畜産総合研究センター課題評価票(中間評価)

部会構成員氏名	阿部 亮
	元井 霞子
	香川 莊一
	堀江 光洋

研究課題名	安価な発酵飼料給与による肉用牛の低コスト肥育技術の開発	
研究期間	平成16～20年度	
研究の進捗状況及び今後の研究計画	<p>第一期試験(平成18年1月に終了)では、黒毛和種去勢牛 8頭を供試し、稲わらともみ殻を粗飼料とし、配合飼料を給与する対照区(4頭)と、濃厚飼料として、小麦ダスト、コーヒードロップ(チャパレット)、トウモロコシ、ビール粕、配合飼料等を混合して調製した乳酸発酵飼料を給与する発酵飼料区(4頭)とを比較した。</p> <p>発酵飼料区は飼料摂取量がやや多く、枝肉の格付け成績が高かったが、日増体量はやや低かった。飼料コストは約35%低減された(粕類は工場渡し価格で試算)。</p> <p>平成18年度から実施する第二期試験では、黒毛和種去勢牛8頭を供試して、第一期試験で用いた食品製造粕類等に加えて、そばすそ粉(そば製粉時に発生するそば粉主体で若干のそば殻を含む製造粕)、生野菜残さ(大手弁当外食産業で発生する野菜くず)、醤油粕等を取り上げ、肥育試験を実施する。</p> <p>なお、家畜購入費と収容施設の制約から、配合内容を変えた試験を2回実施する。</p>	
評価項目	所見・指摘事項等	
1. 研究課題の重要性(県民ニーズ等をふまえたものであるか。)	a.高い b.妥当 c.低い	<p>・平成17年度「酪農・肉用牛生産近代化計画」では、肉用牛に関し、未利用資源の有効利用を強調している。県内の食品製造業と畜産を結び付ける貴重な課題である。</p> <p>・発酵飼料による本研究の第一期試験では、肉質面で良好な枝肉成績が得られている。さらに、本県で生産量が多いが未利用の野菜くず等を加えた第二期試験の成果が期待できる。</p> <p>また、肉用牛での試験や発酵飼料による試験はほとんど行われていない点でも本研究課題を実施する価値は充分にあり、重要な課題である。</p> <p>・食品残さの有効利用と低コスト肥育技術の手掛かりができたことで、さらなる効果が期待できる。</p>
2. 研究課題を県が行う必要性(国、市町村、民間に任せられないか。)	a.高い b.妥当 c.低い	<p>・全国各地に、このような試験の積み重ねが必要。それによって、国の飼料自給率が向上し、その恩恵を地域の産業(肉用牛肥育)と消費者が甘受する。</p> <p>・本試験は、肉用牛を用いることから試験コストもかかり、さらに、発酵飼料の調製も安定的に行う必要があるため県の研究機関が行う必要がある。</p> <p>・多様な食品残さ等に応じ、地域での有効活用を図るための技術開発に期待する。</p>

評価項目		所見・指摘事項等
3. 研究計画の妥当性及び達成の可能性(研究計画が研究を遂行するのに適切であるか。また、研究計画を達成することができるか。)	a.高い b.妥当 c.低い	<ul style="list-style-type: none"> ・未利用資源を主体としたTMR(粗飼料と濃厚飼料が適正に配合された牛の混合飼料)の調製と給与の試験、更には、食味試験に至る、一連の体系的な試験の組立てを評価する。 ・第二期試験は、野菜残さの利用が目玉となっているが、ビタミンAと肉質との関係も危惧(く)されるので、特に肥育中期のカロチン給与には注意が必要である。 ・第一期試験では、尿石症の発生が認められているが、これはおそらくリン酸塩尿石症と思われるので、第二期試験では、特にリンとカルシウムの給与バランスにも考慮した計画をたててほしい。 ・飼料コストと肉質への影響の両面からの成果に期待する。
4. 研究資源の妥当性(研究費や人材等が研究を遂行するのに適切であるか。)	a.高い b.妥当 c.低い	
5. 研究成果の波及効果及び発展性(研究成果が試験研究機関の関係する分野に及ぼす影響は大きいか。また、将来の発展性があるか。)	a.高い b.妥当 c.低い	<ul style="list-style-type: none"> ・輸入トウモロコシの先行きの供給不安定・高価格が懸念される中、試験の成果は、飼料自給率向上と肥育農家の経営安定に資する。 ・食品残さ飼料の処理は、加熱乾燥処理が一般的であるが、乳酸発酵の本技術が普及すれば、環境負荷やコストの点でも有効な技術となる。第一期試験のように肉質成績も良ければ、この方法の発展性、波及効果は高い。 ・肥育経営の技術の安定と経営改善が進むことを期待する。
6. その他		<ul style="list-style-type: none"> ・尿石症を予防したり、肝機能を維持したりするなど供試牛の健康管理に留意する。 ・研究成果とする時には、枝肉重量やBMS(脂肪交雑)などの肉牛の目標を明確にする。
総合評価	a.妥当である。 b.部分的に検討する必要がある。 c.中止すべきである。	

(4) 事後評価

平成18年度畜産総合研究センター課題評価票(事後評価)

部会構成員氏名	阿部 亮
	元井 霞子
	香川 莊一
	堀江 光洋

研究課題名	牛ふん堆肥と農場有機性残さとの混合堆肥化の検討	
研究期間	平成16～17年度	
研究成果	<p>家畜ふん堆肥の循環利用を図るため、農場有機性残さと牛ふん堆肥の混合肥料化について堆肥成分と堆肥化による植物病原菌の殺菌効果を検討した。</p> <p>収穫終了後にハウス内で乾燥・細断したトマト茎葉残さ、及び水分調整したラッカセイ茎葉残さを、牛ふん堆肥で包み込む形で堆積することで、いずれも高温で良好な発酵がみられ良質な堆肥が調製できた。</p> <p>残さ中に残存する植物病原菌の殺菌状況から、トマト茎葉残さ混合堆肥は施肥利用が可能であるが、ラッカセイ茎葉残さ混合堆肥は殺菌効果が不十分で検討を要する結果となった。</p>	
	評価項目	所見・指摘事項等
1. 研究計画の妥当性(研究計画が研究を遂行するのに適切であったか。)	a.高い b.妥当 c.低い	<ul style="list-style-type: none"> ・家畜ふんと農場残さの組合せによる堆肥化、耕畜連携の着眼点は良い。 ・トマト茎葉残さとラッカセイ茎葉残さを堆肥化して利用しようとする計画、特に植物病原菌の殺菌効果を検討しようとする研究計画は、十分に妥当性があったと考えられる。 ・堆肥化による植物病原菌の殺菌効果の更なる改善に期待する。
2. 研究資源の妥当性(研究費や人材等が研究を遂行するのに適切であったか。)	a.高い b.妥当 c.低い	

評価項目		所見・指摘事項等
3. 研究目標の達成度、研究成果の波及効果及び発展性(研究成果が試験研究機関の関係する分野に及ぼす影響は大きかったか。また、将来の発展性があるか。)	a.高い b.妥当 c.低い	<ul style="list-style-type: none"> ・トマト茎葉残さの堆肥化は成功し、十分に実用化につながると思われる。一方、ラッカセイについては殺菌効果の点で不十分と思われ、実用化するためには更なる工夫が必要である。ラッカセイに関する成果は、堆肥化には素材として不向きであるという後向き成果にはせず、今回の研究からもいくつか改善点が考えられるので、今後はその点も考慮して検討してほしい。 ・他の作物残さへの波及効果を期待する。
4. 当初の研究目的以外の研究成果該当する場合のみ評価	a.大きい b.小さい c.無い	
5. その他		<ul style="list-style-type: none"> ・耕畜連携堆肥作りに役立つ。
総合評価	a.計画どおり又はそれ以上の成果が得られた。 b.計画に近い成果が得られた。 c.成果が得られなかった。	

3 畜産総合研究センター課題評価専門部会開催日

< 第1回 >

1 日 時 平成18年7月26日(水) 13:20~16:10

2 場 所 農林水産部会議室

3 出席者

(専門部会)

阿部 亮 部会長、元井葎子 部会構成員、香川莊一 部会構成員、
堀江光洋 部会構成員

(千葉県)

畜産総合研究センター 内村センター長、山田次長、塩沢企画調整部長、
大久保生産技術部長、遠藤生産環境部長ほか
畜産課 瓦井主幹ほか
農林水産政策課 宇田川試験研究担当課長ほか

4 内容

(1) 畜産総合研究センターの研究課題評価について

< 第2回 >

1 日 時 平成18年8月2日(水) 13:20~15:35

2 場 所 農林水産部会議室

3 出席者

(専門部会)

阿部 亮 部会長、元井葎子 部会構成員、香川莊一 部会構成員、
堀江光洋 部会構成員

(千葉県)

畜産総合研究センター 内村センター長、山田次長、塩沢企画調整部長、
大久保生産技術部長、遠藤生産環境部長ほか
畜産課 瓦井主幹ほか
農林水産政策課 宇田川試験研究担当課長ほか

4 内容

(1) 畜産総合研究センターの研究課題評価の取りまとめについて